

昭和ひとけたの童と里山

平 畑 政 幸

ミレニアム（千年紀）のことは新聞にぎわした年は去り、二十一世紀の幕が開いた。世の中の変化と進展のスピードに遅れまいと、あせる気持ちは平均余命が両指の数になってしまった今も同じである。私の子供のころ、大きな都会に出る鉄道の駅まで一時間も歩かねばならぬ山村で、まさに里山と童の生活を送ってきた。さまざまなことが思い出されて懐かしい。

里山という言葉にはいろいろなイメージがある。環境庁に関わる研究会が使う用語に「里地自然地域、山地自然地域など里地があるが、里山と聞くと、のどかな風が流れてくる。ヒトの力で自然を改造して成り立った都市に対して、自然環境にとけこんで逆らわずに共生してきたのが里山、50年前にはどこにでもあり、山すその丘は、1000年以上も緩やかな歴史が流れ、安定した人のいとなみの場であった。

中国山地の広島よりの村では、段々畑は浅緑のクワにおおわれていた。昭和8～9年小学校低学年のころの、4月中下旬だろうか、3～4令カイコの棚を置いた居間の床下に畳1枚ほどの「暖炉」を掘り、炭火で暖房していた、居間は「おカイコ様」の部屋になっていたのである。急に寒波がおそったのだろう。母親のあとにくっついて歩く童も指に刃の付いた指輪をはめて桑つみをした。しかし、カイコは永く続かなかったようだ。間もなく桑畑はウインチで大きな株が堀りおこされた。その後はコンニャク玉の栽培が変わった。畑によって丈の違う葉（葉柄）の並ぶさまは威勢が良く美しかった。コンニャク玉は冬にはいろいろのある部屋の天井裏に並べる、これは兄と一緒にの仕事である。4年ものは子供の頭ほどもあり、俵につめて集荷倉庫まで背負っていくのである。

父は木こりを副業としていた、3kmも離れた山に連れられて行って、伐り倒され斜面をすべり下る木のすごい勢いと轟音に圧倒された。何を手伝ったか思い出せないが、コリヤナギの弁当箱のご飯を食べたことは忘れない。短い丸太を背負って帰ることが何回かあった。炭焼きの手伝いは家の近くであったが父は暇があるとヤスリと刃先をかしめる小道具で鋸の目立てをしていた、50cmもある半円形の大きな鋸も懐古の一コマである。

ヤマザクラが咲いてしばらくすると、緑鮮やかな苗代の風景である。メダケ1、2mの竿を使って苗をなでるようにして飛び出す白い蛾のニカメイチュウを採って学校で小銭をもらう、童のノート代になっていた。小学

校中高年のなると一人前の働き手である。田植えは家族総出、近隣の人の援助あわせて20人もの賑やかな、しかも腰が痛くなる苦しい仕事であった。秋はさらに大変である、5～6段もある高い「はで」（稲木と呼ぶ刈ったイネを乾かす丸太を組んだもの）に登って、下から投げてもらい稲束を手際よく掛けていくのも子供の仕事である。4～5mもの高いところからの田園風景が浮かんでくる。10月半ば、天気心配なときは、はでから下ろした稲束を背負って、一人一人歩ける山すその登り下りの多い道を、最も遠い田では3kmも何度も休み、あえぎながら暗くなるまで運ぶのである。納屋の狭い家で土間にもイネをうずたかく積んで。翌日足踏み脱穀機でガーリン、ガーリンとこいでいく（脱穀）、「万石どうし」という初篩い分けの器械を手で回すと、強烈なほこりが家中ただよっていた。藁を納屋の二階に上げて積み重ねるのも子供の仕事である。赤土とスギ板を竹籠にしこんだような「初すり器」も使った経験がある。しばらくすると新しい機械が集落をめぐって快音が響くようになる。

昭和30年代までウシを飼っていた。朝早く母親に連れられてあぜ道や斜面で刈った柔らかい草を朝と夕方に与え、散歩をさせたり、敷きわらを投げ入れたり。母親の喜ぶ顔を見て疲れを忘れるのであった。

夏休みになると3kmも離れた山に柴刈りに行くことが何年か続いた。きつい斜面のマツの疎林の1、2mも伸びた下草を2～3年ごとに刈り取るのである。雨にうたれないように田圃の中にある小屋に保存して。冬に「押し切り」で短く刻んで水田に鋤込むのである。ウシに引かせる鋤も上手に使えるようになっていた。下草には小さいネササヤコナラ、アベマキ、アラガシなどの「ひこばえ」の柔らかい葉や小枝があり、チガヤ、ススキに混じって常緑のヒサカキやイヌツゲが生えていた。母や兄はイヌツゲを見つけると「これは根から抜け」といって二人がかりで引き抜いていた、イヌツゲの枝やとげは腐らないで残るので、素足で入る水田に入れてはならないのである。化学肥料の少ない時代、芝草は貴重な緑肥であった。柴刈りのとき母は「一束の柴は大きめのハマグリ一つほどの土になるのだ」と話して聞かせた。

柴草を刈る低い山を3～4分登った上の方に直径15cmのアカマツがあり、そこに畳一枚ほどの我が家の貴重なマツタケの「しろ」があった。はうようにして軽く押えて探すスリルは忘れられない。兄や私のころは5cmほど

のマツタケを、毎年5～6本を採るのがやっとならったが、妹たちの時代には3kg以上も採れていたらしい。

梅雨があがったころ雑木林の中を歩きまわって散在するマダケの竹の皮を拾った、直径10cmもあるマダケの皮を集めるのは気持ちがよかった、皮は広げて板に挟んで重い石を乗せて置いた、買い集める人が来るのである。

父親に連れられてヌルデの葉につくヌルデミミフシの虫えい（五倍子）を採って回ったことがある、フシと呼んでいた。葉が膨らんで耳たぶのようになり、さわると感触はよいが、割って中を見ると黒いアブラムシがうごめいていた。これにはタンニンの含有が多く、インクなどを作るのに使われ、高値で売っていたようだ。生き物と関わりの深い童の生活は村の学校を出るまで兄弟姉妹に引き継がれてきたのである。